

清沢満之における「自己」

脇 本 平 也

一

御紹介いただきましたように、寺川さんとはもう随分長いおつき合いになります。その寺川さんから、臙扇忌で何か話をしろ、という電話をいただいたとき、大谷大学といえは清沢満之については大本山みたいなところですから、私のような者が出ていっておしゃべりするなんてことはおおよそおこがましい、という気がしまして、電話の前でまず逃げ口上を考えました。しかし、せっかく寺川さんが言ってくれることであり、清沢満之流にいえば、これが「如来の成さしめ給ふ所」（倫理以上の安慰）なのかもしれない、と思ひ直してお受けした次第です。その後、何を話しようかというので考えたのですが、清沢満之については皆さんのほうが専門的に、あるいは主体的にずっと深く関わっていらっしゃるわけですから、ここでは満之自身について語るといふよりは、むしろ宗門には無関係な門外漢の私が、どのようにして清沢満之に縁を結ぶようになったか、その過程の中で、満之をめぐっていつも私に気がかりになっていることは何か、それが表題に出した「自己」ということなんですけれども、そういうふうなことをお話してみようかと考えたわけです。その意味で、大変恐縮ですが、非常にプライベートな思ひ出話のようなところから始めさせていただきます。

今日京都駅に着いてまたその想いを深くしたのですが、京都は私には非常に懐しい所です。もう四十五年の昔になるわけですが、昭和十四年に旧制の三高へ入りまして、田舎から出てきてここで三年間のいわゆる青春時代を送りました。その間にいろいろな先生方から教えを受け影響を受けたわけですが、哲学関係では土井虎賀寿という非常に人気のある先生がいました。われわれは土井虎、土井虎と呼んでいましたが、この先生については、『われらが風狂の師』（青山光二著）というモデル小説が生まれて、そこに描かれているのは、晩年のある意味で悲惨なそううつ症状の土井虎ですけれども、われわれが三高で講義を聞いていた頃の土井虎は違っていました。すでに変人の傾向はありましたが、講義には大へん熱がこもっていて、若いわれわれに深い影響を与えました。その中でも私が鮮明に覚えているのは、哲学の時間に土井虎が道元にふれたことです。はじめヘーゲルの「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」という言葉を引いて、ヘーゲルにみられるレアリズムということを問題にしていたのですが、やがて、そのヘーゲルよりもはるかに優れたレアルな思想家が日本にいる、それは道元だ、という話になりました。そして「華は愛惜にちり脚は棄嫌におふるのみなり」という道元の言葉を黒板に書いて説明してくれました。この句は岩波文庫本『正法眼蔵』に出てると紹介されましたが、このあたりが、道元に対して私が何か関わりを持つようになった最初のきっかけであったと思います。

それから、倫理学の方に八木理三という先生がいました。倉田百三、山本有三と並んで一高の三ぞうとよばれたそうだが、という噂でしたが、この先生が倫理の時間に『歎異抄』の話をしてくれたことも覚えております。

そして、やはり哲学・倫理の担当で相原信作という先生がいました。この先生は、戦後大阪大学の哲学の教授になられました。その当時、われわれの間の噂ではカトリックの信者だということでした。この相原先生が、やはり哲学史の講義のときに、清沢満之という名前を黒板に書いてくれました。その当時、岩波文庫本で『清沢満之文集』と出ているのが出ていまして、それを読んでみるようにと紹介してくれたわけです。これが、私の清沢満之の名に接した最

初の機会でした。

高等学校時代のこういった先生方の影響もあったのか、私は、大学は文学部の宗教学科へ入ることになりました。三高を卒業したのが昭和十七年の三月ですから、当時のいわゆる大東亜戦争はすでに始まっていました。落ち着かぬ状況の中で、怠け者の私は、法学部や経済学部へ入るための受験勉強をするのもものうく、とにかくおもしろそうでも試験入学のできるころに行こうというので、東大の宗教学科へ入りました。

入ってみると、非常時だからというので大学は年限短縮となり、一年半で昭和十八年十月には三年生になりました。その十二月、いわゆる学徒出陣というので、私は海軍に入りました。まあ幸か不幸か死なないうで終戦後に帰ってきました。再び大学の研究室へ顔を出したところ、君はもう卒業した、といわれてとまどいました。というのは、三年になりたての時に兵隊へ行きましたから、卒業論文はまだ書いていないわけです。ところが、聞いてみると、大学側は、兵隊に行っている者ですに必要な単位をそろえている者は卒業なしで卒業を認める、という措置をとったということでした。学業の途中で兵役についたものに対する特別な温情ということだったのでしようが、そういう昭和十九年九月の卒業生は、やがてポツダム学士とか大東亜学士とかよばれることとなります。それで先生のところへ、今から卒論を書くわけにはいかないか、という相談にまいりましたところ、では大学院に入りなさい、といわれまして、昭和二十一年四月から大学院に籍を置くことになりました。

旧制の大学院ですから、今と違って、単位や論文なんかどうでもいいというルーズさでしたが、私は卒論のつもりで、二年半ほどかけて二つ研究報告を書きました。その時の大学院の研究テーマは「信仰における自我の問題」という題でしたが、実際に取り扱ったのは、親鸞と道元でした。かれらの思想や信仰をとらえるに当たって私の注目したのは、その背後に潜んでいる深い主体的な体験の問題でした。そういう体験の問題を考えようとすれば、やはり具体的にその当人の生活史を見てゆく必要があります。ところが鎌倉時代の人物になると、どうもその生活史の詳細は十

分には分からない点が多いわけですが、それに比べれば、明治時代だとまだ資料が多くて、もう少し細かく正確にあとづけてみることはできるのではなからうか、というふうに予想されたこともあって、明治の宗教者へ少し研究の目を向けるようになってきました。

ちょうどそのころ、昭和二十三年ごろでしたか、中山文化研究所というところの研究メンバーに加わることになりました。当時中山太陽堂という化粧品の会社がありまして、その社長が篤信の仏教信者だったところから、仏教研究のための研究所を設立していたわけですが、その中山文化研究所の所長が小野清一郎先生で、主事が雲藤義道さんでした。記憶違いがあるかもしれませんが、その他に、宮本正尊、結城令聞、林恵海、岸本英夫、柴田道賢、堀一郎といったそうそうたる先生方が顔をそろえておられました。そこへ助手・大学院レベルの白川良純、石田瑞麿、早島鏡正、柳川啓一、高木宏夫、その他の先輩・同輩の皆さんが加わって、定期的に研究会を開き、われわれ若手が諸先生から指導をいただきました。

そのうち、共同してまとまった研究をしようという話になって、二つの計画がすすめられました。一つは北陸真宗地帯の実態調査、もう一つは明治の仏教者の研究でした。明治の仏教者については、誰か一人を若手の各人で分担するというので、はじめ清沢満之を白川良純さん、井上円了を私、といったふうな案が出ました。しかし相談の結果、白川さんが私の洩らした希望をすつと容れて下さって、分担を交代することになりました。相原先生に紹介されたあと、『清沢満之文集』を買ってひろげてみたのですが、わからないことの方が多くて、だから当時はまだ皆目見当もついていなかったわけですが、それだけにかえてというのでしょうか、清沢満之という人が気がかりで、そんなことをちょっと口にした途端に、白川さんが「じゃ脇本君、僕と代わろう」といって下さったのです。

白川さんは学徳兼備の立派な先輩で、その後もいろいろなと本を貸して下さったり、研究に示唆を与えて下さったりで、大変なお世話になりました。また、宮本正尊先生ですが、満之の関係者たちの名前の読み方からはじめて、いろ

いろいろ細かくお導き下さいました。例の建峯、骸骨、石水、臘扇、浜風という五つの号に分けて生活史を整理する方法も、このときはじめて宮本先生から教えていただきました。そういう御指導を受けながら、当時の三巻本の全集を中心に研究を続けていたところへ、こんどは寺川さんが大学に入ってこられました。そのとき私はまだ大学院に在籍中でしたが、半年後の昭和二十四年十月に助手になりましたので、それから寺川さんと話し合う機会がふえました。

そのうちやがて、西村見暁さんの『清沢満之先生』という本が出ます。この本が、生活上の体験にそって満之の思想・信仰の形成過程をあとづけたもので、その意味では、私のやりたかったことはもうこれで終ってしまっただけ、という印象さえもりました。続いて二十六年末には寺川さんが、「白河党改革運動——明治真宗教団の転回点——」と題する卒業論文を提出されました。この谷大図書館などにも通ってきて資料を集め、精細な考察を加えたもので、二三〇枚に及ぶ大変な力作でした。私はそれを読ませていただきましたが、そのおかげで、なかなか整理のつかぬ状況でいた私の研究に対しても一つの見通しを与えられたように感じ、貧しくとも私なりにまとめてみようという気になりました。それで二十七年末になってやっと草稿としてまとめることができました。先程御紹介いただいた拙著『評伝清沢満之』なども、もとをたどればこの草稿にまでさかのぼるわけです。

長々と大変私的な回顧談で恐縮の至りですが、こんなことを話しましたのも、満之に対する私のつながりが、実は私一個の単なる私的な出来事ではなくて、相原先生をはじめ、ここではふれなかった人々をも含めて大変多くの方々とのつながりのなかで成立している、ということを申しあげたかったからです。その意味では、私が満之について述べることは、すべて多くの方々から教えられたことであり、たとえば改革運動の経過など寺川さんにすっかりおんぶしているところもあります。といっても、自分の責任を回避しようというのではありません。もちろん全責任は私の自己にあります。ただその私の自己なるものが、実に多くの方々とのつながりにおいてあるわけで、それらのつながりを抜きにしては雲散霧消するほかない、ということを満之をめぐって実感している次第です。

こうして清沢満之という人が、どうもずっと私にとっては何がかりになり続けているわけですが、この「気がかりになる」、「気にかかる」という言い方をしますのは、私の方から関心を持つというよりは、何か向こうから私に関わってくる、といった印象だからであります。清沢満之という人が、いろんな時に関わってくる。研究の点でもそうですけれども、それだけではなくて、私人間として生きるという、その点でも関わってくる。そういう印象なのです。それで思い出すのは、ティリッヒのいう *ultimate concern* です。「究極的関心」と訳されていますが、それだと、私の方から究極的、最終的に関心を寄せるもの、という印象になります。しかしティリッヒを読んでみると、こちらの方から関わりを持つというよりは、やはり、向こう側から私へ関わってくる、という意味のようです。ドイツ語本では、これが *was uns unbedingt angeht* すなわち、われわれに無制約的に関わってくるもの、あるいは *letztes Engstehen* 最終的に私が心を掴まえられてあること、などと表現されているそうです。ティリッヒはプロテスタントですから、人間の究極的関心というのは、実は、自分が好き勝手に関心を持つというのではなくて、関心を持つまいと思っても持たざるをえないように、神の側から関わってくる、というふうな含みをこめていわれているように思います。

私にとっての清沢満之も、もちろん神というわけではありませんが、いつも何か関わってきて、気にかかるという印象なのです。先程の感話の中に、清沢満之という人が未解決の人であった、というお話がありました。それとはまた別に、私自身が満之に関わられていて気がかりで、どうもいつまでたっても未解決で卒業できない。ことに私の場合、客観的宗教研究としての宗教学なんかをやった人間の、あるいはやらざるを得なかった人間の、いわば性格的な煮えきらなさといったものかもしれませんが、一つの信仰上の決着をもって満之に対して態度決定をするというふ

うにもいかない、まあ、はなはだ中途半端にどうも気がかりで、という状況であります。そして、その気がかりの中心は何だろうということになりますと、やはり「自己」ということのような気がするわけです。表題はそういう意味です。これは、先程ふれましたように、私の大学院のテーマが自我ということだった、それがずっといまだに尾を引いているようです。

ところで、自己の問題をめぐっての議論には、神学、哲学、社会学、その他いろいろな立場からのものがあるでしょうけれども、私としては、やはり心理学的なものに興味をひかれます。これまでの研究が、宗教者の思想や信仰を当人の生活上の体験と結びつけてとらえようという方向のものでしたから、体験の分析や解釈という点では、心理学的なアプローチにかなり比重がかかるわけです。そういう心理学的な角度からの自己論といったものを、しばらく清沢満之を離れて、ちょっと拾いあげておきたいと思います。

われわれは、自己と自分とかいうことを日常的によく口にしていきます。それでは、自己ないし自分とは何か、ということになると、実はあいまいなところ、解っているようで解らないところが多いところが出てきます。例えば、「おい、脇本」と呼ばれば、俺が呼ばれた、自分が呼ばれた、と思います。自分と名前とを区別して、ことさらに自分の名前がよばれた、というふうには思わないのが普通です。この場合には、名前がすなわち他ならぬ自分であると受けとめているわけです。あるいは、誰かが私の上着を引っ張る。そうすると、俺の上着を引っ張っているのは誰だ、というのではなくて、誰だ、俺を引っ張るのは、という。つまり、ここでは上着と俺とが一つになっているとみられます。また、自己紹介をしるといわれれば、生まれや履歴や現在の職業や地位などをしゃべります。とすると、自己というものの中には、生まれや履歴などといったものも含まれていることになります。こう見てくると、自己というものは、決して限定され枠づけされているのではなくて、内にいろいろなものを取り入れてかなり広がっていく方向を持っているわけです。そこで、我が子、我が家、我が祖国というふうには、我が領域、すなわち自己と一体化される

自己領域が拡大していく場合も出てきます。

しかしそうはいっても、我が祖国も我が子も、結局のところ自己ではない、名前も上着も、自己の一部ではあっても自己そのものではない、という一面も出てきます。それでは、自己というのとは一体どこにある、というので尋ねていくと、らっきょうの皮でもむくように、行方知れずになって遂につきとめることができないうようになります。たとえば上着を脱いで裸一貫になると、肉体としての自己が出てきますが、それが自己の最終の決着所かというところではない。たとえこの肉体を殺しても自己をつらぬかねばならぬ、といって信念に殉ずる場合もあります。そうすると、肉体よりももっと狭い、もっと微視的な自己として、主義、主張、信念というふうなものがでてきます。しかし、主義、主張、信念なども実は自己の一部であって、死を賭してもそれをつらぬく自己、という自己がもう一つ奥にひかえているとみることができません。そういう方向で追いかけていけば、自己は無限に縮小していくわけです。

こうして、いわゆる自己には拡大の方向と縮小の方向とがありますが、後者の方向に主体としての自己すなわち「を、前者の方向に客体としての自己すなわち me を設定して考えようとする見方が、心理学説として成立してきます。すなわち「は客体化されることのない純粹主体としての自己、ego は客体化されてその周りに拡大する自己というわけです。me に関しては、自己関与の領域 ego-involvement とか自己像 self image とかいった形で問題にする人もあります。いずれにしても、自己とは何かという問いに対して客体化された自己の諸相が立ち現れ、それらとの関わりの中で自己の生き方がぎまぎっていくもののように思われます。

三

さて、話を清沢満之にもどしてみますと、かれの書き残したもののあちらこちらに、自己とは何か、という問題が繰り返して出てきます。そのなかで、私がいちばん衝撃的な印象を与えられたのは、やはりあの「絶対他力の大道」と

いう題で『精神界』にのせられた、皆さん御承知の文章であります。

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に、法爾に、此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是れなり。只だ夫れ絶対無限に乗托す。故に死生の事、亦た憂ふるに足らず。死生尚ほ且つ憂ふるに足らず。如何に況はんや、之より而下なる事項に於てをや。(中略)我等は寧ろ只管絶対無限の我等に賦与せるものを楽しまんかな。

これは、満之の自己観の決着とみてよいものかと思いますが、ここに至るまでには、長い自己省察の道程があるわけです。「嗚呼、自己省察なるかな自己省察なるかな。(中略)人苟も昏迷ならざらんとせば、必ず先づ自己の何者たるかを省察せざる可からず」(他方信仰の發得。こういって満之は、生涯をかけて自己を問い続けます。そして、問いの旅路の果てに「自己とは他なし、是れなり」という一つの落ち着きどころを見いだしたのだと思われれます。ところで自己は、先程の用語でいえば、Iではなくて ego に属するものということになります。私は、自己というものをこうとらえる、といっているのですから、これは、満之の自覚した一つの自己像と考えられます。

ここで自己像というのは、自己とはこういうものであるとか、あるいはありたいとか、あるいはあったとか、当人が自己をめぐる描くそういったイメージをさします。それが明確に自覚される場合もあれば、無意識の深層に沈んでいる場合も含まれます。そういう自己像といわば対話を交わしながら、主体的な自己はそのいのちを管んでいきます。俺はどういう人間だとか、俺はこういう人間でありたいとか、そういう理想にはうたた遠い現実の俺だとか、なにかなそういう自己というもののイメージとかかわり合いながら、人間は生きていくわけです。そして、当人のうちにかなる自己像があるかということが、主体としての自己の生き方に深く影響してくるといわれます。たとえば、発達心理学などの分野では子供の自己像の例が提示されています。すなわち、親から「お前はいい子だ、強い子だ、泣かない子だ」といって育てられた子供は、「僕は強いんだ、泣かないんだ」といった自己像を持つ。すると、知らず知らずのうちに、その自己像に現実の自己が合致してきて、本当になかなか泣かない強い子になるという話です。

この例は、問題のレベルの単純なものにすぎませんが、清沢満之の場合にも、基本的には当てはまる場所があるのではないかと思われれます。「自己とは即ち是れなり」という自己像は、まさしくこうだ、という満之の現実でもありましょうが、また同時におそらくは、こうありたい、こうあるべきだ、という理想でもあったらうと考えます。そういう理想像と現実像との合致の平安のみならずまた、分裂の憂苦をも満之はたっぷり実験するわけですが、いずれにしても究極的には妙用に乗托してある、という自己像の形成確立を、あの文章で高らかに宣言しているとみられれます。

このような自己像の形成は、何も無い、宙に浮いたようなところに自己をポツンと放り出して成立するのではなく、必ず何らかの環境の中に自己を位置づけて成立します。泣かない強い子というのは、親の前や友達の間でという環境における自己を指すわけです。その意味で、自己と環境とは相互分化の関係にあるといわれます。一方で環境が環境として成立すると同時に、他方で自己が自己として成立していくこととなります。満之の自己も「此の境遇に落在せるもの」として捉えられています。この『臘扇忌』の語句にちょっと手を入れて発表された「絶対他力の大道」の方では、「現前の」という言葉がつけ加えられて「この現前の境遇」となっています。いま目の前にありありとある境遇というわけで、環境のもつ意味や一瞬一瞬の現在ということが強調されたとみられます。ともあれ満之は、さまざまな境遇との相互分化の過程のうちに複雑な自己像を構造的に組み立てていくことになったと思われれます。

相互分化ということは、ことばをかえれば環境と自己とがさまざまなレベルで対応するということです。そこで、自然的生物的環境に関しては肉体的な自己が、社会的環境に関しては地位や役割に任ずる社会的な自己が、文化的環境に関しては価値にかかわる精神的な自己が、それぞれに対応することになります。つまり自己にさまざまなレベルを分けてみることができるわけですが、満之の場合、まず注目されるのは肉体的な自己の問題です。すなわちかれは、若くして結核にかかります。当時としては、もはや死ぬしかない、という死病に肉体をおかされます。そこで、生死

の巖頭に立った自己として、改革運動をはじめ激しい生を生きるわけです。そういう現前の境遇のまったただなかで「死生のこと、亦た憂ふるに足らず」といいます。しかし、実は足りないどころのさわぎではなくて、はじめは大いに憂えた。憂えに憂えた、その憂いのなかで、肉体的にそういう自己として落在している、そのことが、まさしく絶対無限の妙用にほかならぬと気づかされてきた。そういうことなのだろうと思います。

肉体に対して、つぎに精神としての自己の問題ですが、これについては『我が信念』、原題でいえば『我は此の如く如来を信ず』という文章が想い起こされます。そこに精神的自己、デカルト流にいえば「思うもの *res cogitans*」としてのわれ」が出てくるわけですが、捉え方の方向はデカルトとは正反対になります。すなわちデカルトの精神は神の存在さえも論証してみせますが、満之の場合には、「私の智慧や思案の有り丈を^片尽して、其の頭の挙げやうのない様になる」境遇に投げこまれます。「何が善だやら悪だやら、何が真理だやら、非真理だやら、何が幸福だやら不幸だやら、一つも分るものではない。我には何にも分らない」、そういう自己として妙用のままに落在するわけです。

社会的自己という面では、日記に記された『回想の文』が想起されます。そこで「人事の興廢」「人情の煩累」「大なる難事」とかれがよんだ、さまざまの困難な境遇に処する自己が問題になります。具体的にいえば、教団改革運動をリードする自己、実父と養家の板ばさみになる自己、檀家にすつとは受け容れてもらえない自己、真宗大学学監として進退する自己、妻子の病や死に直面する自己などです。それぞれの境遇で地位につき役割をにない、それらを何とかうまくやりたいと努力の限りを尽くしてみるが、必ずしも思うように行かない。社会的に自己に課せられる義務や責任を尽くそうとして追求していけば、「終に不可能の歎に帰するより外なき」自己です。そのままでは自殺もしかねない自己が、しかも法爾に落在して生きる自己となるわけです。

こうして満之の自己、正確には自己像が、肉体的、精神的、社会的に多くの難問をはらんで成立しますが、それらの難問を一挙に解決するもう一つの自己像が、妙用乗托の宗教的自己像であったと思われまます。この宗教的自己と相

互分化する環境的世界は、もはや自然でも文化でも社会でもなくて、それらすべてを貫いてはたらく絶対無限の妙用ということになるのでしょうか。「宇宙万有の千變万化は、皆な是れ一大不可思議の妙用に属す」。この妙用に乗托する宗教的自己像というのも、従来の自己像のレベルをつきぬけて超えたところに成立するもののように思われます。

自己像の形成成立ということをちょっと別の角度から考えてみますと、自己の姿を見て取って像に表象する何者かの眼がそこにはあるはずです。たとえば自分で自分を見る自分の眼があったり、他人が自己を見るといって他人の眼があったり、あるいは他人が自分をこう見るだろう、と推測して見ている屈折した自分の眼があったりするわけです。さらには、自分や他人を含めた社会の眼というものもあり、人類が歩んできた歴史の眼というのもあるでしょう。また、社会や歴史のなかで作り上げられてきた理想の眼といったものも考えられます。そういういくつかの眼を用いて自分をながめるところに、自己像というものが形成されると思われれます。

ところがそういうもろもろの眼、正確にはそれらによって見ているつもり自分の眼ということになりましょうが、それがつまるところどれほど適正な自己像を作り上げることができるのか、保証の限りではないわけです。自分が自分をみている限り、そこには傲慢な自惚れがあったり、あるいは逆にまちがった劣等感があったりします。自分で自覚したくないところから生ずる無意識のうちでのさまざまな自己欺瞞です。社会や歴史や理想の眼といえども、時と所の価値観の変遷に従って変化するので、必ずしも究極的なよりどころとはなりえない点が残ります。そこでわれわれの作り上げる自己像は、最終的には保証の限りではない、という不安な側面をまぬがれることはできません。それが結局のところ、人間の世界の有限性ということでしょうけれども、そういうことに気がついたとき、人は、自他を超えて確かな別の眼、自にとらわれず、他にかかずらうことなき、いわば第三の眼に照らされたいと願うのではないのでしょうか。そういう願いにこたえてようやく見えてくる確かな光景が「一大不可思議の妙用」ということなのではないでしょうか、というふうなことを考えてみる次第です。満之の自己像の終景もそういうところにあっと思われれます。

一色の映ずるも、一香の薰ずるも、決して色香其の者の原起力に因るに非ず。皆な彼の一大不可思議力の発動に基くものならずばならず。色香のみならず、我等自己其の者は如何。其の従来するや、其の趣向するや、一も我等の自ら意欲して左右し得る所のものにあらず。ただ生前死後の意の如くならざるのみならず、現前一念における心の起滅亦た自在なるものにあらず。我等は絶対的に他力の掌中に在るものなり。

四

どうも自分でもよくわからないことを無理して喋っているものですから、一向にテキパキした話にはならなくて恐縮です。申し上げたかったことのポイントのようなものを繰り返してみますと、われわれにとって、自己はまさしくかけがえない独自の自己ではありますが、それはしかし、どこか宙に浮いて独りあるわけではなくて、環境との相互五分化において成立するものであり、したがって、何ものかに対する自己、何ものかの前での自己であり、あるいは、何ものかの眼によって見られている自己である、というごく平凡なことから。いいかえれば、自己とは何ものかとのつながり・関わりにおいてある関係存在だということです。関係存在というふうに「存在」という言葉を入れると、もうそれだけ静態化し間接化されてしまうような気がしますが、むしろダイナミックな関係そのものが自己である、関係のほかに、関係をぬきにして、どこかに別に自己というものがあるわけではない、そういうことを考えてみるわけです。

また、ちっぽけな私的な思ひ出話になって恐縮至極ですが、八年前になりますか、はじめて外国へ出かけたことがあります。若い頃なまけていたので留学の機会がなく、五十歳半ばになってアメリカからヨーロッパを二ヶ月ほどでまわってくるということになりました。出かける二十日ほど前のある夜、晩飯のときに親父に旅程の計画を話してやりました。親父はもう八十六歳でしたが、弱いくせに酒が好きで、いつも少量の晩酌を楽しみにしていました。その

ときも、酒の肴に息子の初の外遊話を聞いてとても喜んで、今日は大変愉快だから、といってお酒をいつもよりもう一杯よけいに飲みました。いつもより飲みすぎたからというので、風呂に入るのもいつもより遅くして、食後三、四時間過ぎてから風呂へ入りました。そこで上機嫌で、話をうなっていました。風呂だとうまく聞こえるものですか、ますます上機嫌だったと思われれます。しばらくしてふと気がついたら、その話の声がしなくなつて風呂場があまりにも静かなものですから、なにかおかしいぞというので見に行つたところ、浴槽の中でうつぶせにかがんで、「考える人」のようなかっこうで死んでいました。あとで調べたところ脳出血だったので、おそらくあつという間もなかったことでしょう。まあ、大往生、風呂の中で死にましたから湯灌もすんでいるという大変きれいな大往生で、だから、めでたし、めでたしと言われますけれど、しかし私にしてみれば、やっぱり心残りがあります。喜んでくれたというので、私もいっしょに飲んでいたので、もうちょつとやるか、といつてもう一杯注いでやつた、それが親父を冥土へ送るといふ結果になつてしまつたのです。そういうこともあつて、外国を歩いている間ずっと、ふと気がつく私は親父と話をしていました。葬儀を済ませてから二週間位であわただしく出かけましたが、ふと気がついてみると親父さん、と呼びかけては、今日来たここはどうで、明日行くあそこはああで、というふうに話しかけていました。

そのときに、平凡ながら今更のように考えついたのは、こうして話をしているということのうちに、私があり親父がある、ということ。これは、親父の靈魂が肉体の死滅後も生きているとかいったことではなくて、私が私であるのは、親父に対する子としての私であり、親父が親父であるのは、私に対する父としての親父である、ということです。そういう関係こそが、親父の自己であり私の自己であるということです。その意味で、関係以外にどこかにほかに自己があるわけではない、関係こそが自己なのだ、という強い印象を実感したことがありました。そして、自己とは最終的に関係だとして、そういう人間一人一人の自己における関係の総体、全体性としての関係、それが、仏教では法とか如来とかよばれ、キリスト教では神とよばれる、あるいは、清沢満之においては「絶対無限」とよばれる、

そういうことなのではあるまいかと感じた次第です。

こういう実感をもったあと、若い頃に読んだキェルケゴールの『死に至る病』にどこかつながっているようだ、というぼんやりとした記憶がよみがえってきました。岩波文庫本を開いてみると、かなり中略しながら連記すれば、こうあります。

人間とは精神である。精神とは自己である。自己とは自己自身に関係するところの関係である。自己自身に関係するところの関係が他者によって指定されたものである場合には、それは自己自身への関係であるとともに、更にまたその全関係を指定したところの第三者に対する関係でもある。かかる派生的な指定された関係が即ち人間の自己である、——それは自己自身に関係するところにかかる自己自身への関係に於て同様に他者に対して関係するところの関係である。

ここではキリスト教の神観が基底となっているのですが、ともあれ自己を関係として捉える行き方はあちらこちらでとくに説かれており、それを読んでもしかし、実感としては私にはわからなかった、ということのようです。親父の死を契機としたごく素朴な感懐のあとで読み直してみると、満之も『宗教哲学骸骨』の頃からすでにそういうことを何回も繰り返し述べていることやつと気がつきました。たとえば、有機組織、主伴互具、万有転化、万物一体といった事柄です。それらが、ああそういうことだったのか、少なくともいまの私にとってはそういうことだったのか、とうなずかれるような気がするわけです。満之が気がかりであったというのも、一つはそこだったのか、といった感じですよ。

さらに、気づいてみれば、これは清沢満之がはじめていいたわけではなくて、縁起とか因縁とか、あるいは無常とか無我とか、釈迦以来の仏教が説いてきたことはそれだった、つまり、自己とは実体ではなくて関係だ、ということであったと思われる次第です。縁起の関係は、よく網の目にとえられますが、それでは平面化するきらいがあ

るようです。もっと立体的に無常変化の歴史的世界と相依相関の社会的世界のなかでダイナミックにつぎ出されていくもので、強いてたとえるなら蜂の巣の方がよいかも知れません。いわゆる重々無尽の事事無礙法界といったイメージです。そういう世界のことを、清沢満之はまさしくダイナミックに「絶対無限の妙用」とよんだのであろうかと思われます。

キリスト教でも神は交わりの神であるといわれます。旧約にいう「ありであるもの」として、神は確かに実在ですが、しかしその神はダイナミックに人間に交わってきて、すべての人間を関係のなかに設定するわけです。むしろ仏教とキリスト教とを同一視するつもりはありません。ただ、関係ということの捉え方にさまざまな角度があるので、という感想を述べたまでです。

これに関連してもう一つ思い出されるのは、ユングの自己 self という概念です。ユングは、エゴ ego から区別してセルフを考えています。かれの場合には、フロイトと違って、宗教が非常に大きな比重を占めます。宗教の思想を無意識に翻訳したのではないかと思われる点もいろいろ出てくるほどです。セルフというのもその一つかと思われまふ。ユングによれば、意識される個人の中心がエゴであるのに対して、無意識をもふくむ全体的個人の中心がセルフであるといえます。ところが、無意識には個人的無意識のみならず、集合的無意識ないし普遍的無意識がふくまれます。とすると、セルフは有史以来の全人類の無意識という深くかつ広い領域のなかに位置づけられることになるはずで、そのようなセルフは、宇宙万有の中心に位する一点といいなおしてもよいような気がします。ユングは、このセルフの実現、すなわち自己実現が人間に与えられた課題であり、終生そこに向かって歩み続けるべき目標であると考えているようです。このようなユングの自己には、むしろ同一視はできませんが、満之の自己に一派通ずるものもあるように思われます。

宇宙万有の千変万化のうちにあって、妙用に乗托してこの現前の境遇に落在する一点が、満之の自己です。絶対無

限の光は、この一点に焦点を合わせて照らし出します。

無限他力、何れの処にかある。自分の稟受において之を見る。自分の稟受は無限他力の表顕なり。

このような満之の自分、「自己」をめぐって、思いつくままを未熟のままにお話してみました。とくに厚顔にも私的な回想などを長々とまじえて恐縮の至りですが、これも、つながり、かわり、関係としての自己ということを申しあげたかったままで、お聞き苦しかった点は御寛恕いただければ幸甚と存じます。ありがとうございます。

（本稿は、昭和五十九年六月六日大谷大学尋源講堂における煦扇忌法要の記念講演の筆録を先生に加筆訂正していただいたものである。——編集部——）